

# タロ・ジロ記念コイン

## (南極地域観測50周年記念貨幣)の引換発行等

理財局国庫課課長補佐 高野 寿也

「小学校の時、当時の南極観測で、日本の宗谷をソ連のオビ号が助けてくれたことや、タロとジロが生きていたことなどを、興奮と感激を持ってみていて、いつしか自分も、その南極の地に行きたいという夢を描くようになりました。」

谷垣禎一財務大臣による  
「[大臣、夢を語る] 南極への夢」  
(小泉内閣メールマガジン第137号)  
から一部省略して引用

半世紀前、日本中が一体となって応援した国家プロジェクトが始まった。南極地域観測である<sup>1</sup>。先日4月28日、南極地域観測50周年を記念するため、記念貨幣の発行が閣議決定された。南極地域観測50周年は、昭和32年(1957年)1月29日の昭和基地開設以来、国家プロジェクトとして南極地域における科学的な観測研究により、地球環境変動等の諸課題に関し、多大な成果をもたらしていることから、通貨法第5条第2項に基づき「国家的な記念事業」として記念貨幣を発行するにふさわしいとされた。

半世紀の継続もさることながら、敗戦の傷も癒えていないあの時代において、全く微々たる国力にもかかわらず、未知の大陸、南極へ到達し、国民に夢と希望を与えることができたという事実に驚く。当時、子供達までが募金に参加したという。国家プロジェクトと言っても、国民全体の強い支援がなければできないものではない。それだけに、このプロジェクトは今でも、日本人の心を揺さぶるものがある。

国家プロジェクトに関して記念貨幣を発行することは、我が国においては、昭和63年の青函トンネル開通と瀬戸大橋開通に始まる。平成6年の関西国際空港開港にも発行された。いずれも額面五百円の白銅貨幣(当時の通常の五百円貨幣と同じ素材)がそれぞれ二千万枚であった。最近では、平成16年の中部国際空港開港に際して、額面五百円で販売価格四千元(いわゆるプレミアム型)の銀貨五万枚が発行されている。

これまでの4種類は、いずれも国家プロジェクトの「完成」を記念するものであった。南極地域観測は「完成」したわけではない。継続中の国家プロジェクトに記念貨幣を発行するのは今回が初めてである。しかし、自然科学の探求に「完成」は永久に有り得ないことに鑑みれば、当然と言えば当然である。



図柄については、巻頭のカラーページを御覧いただきたい。主役は、無人の昭和基地で南極の一冬を生き延びた樺太犬、タロ(左側)とジロ(右側)<sup>2</sup>である。タロ・ジロ記念コインと愛称してもよいと思う。もちろん、他の死んだ樺太犬を忘れるなという御意見もあるかも知れない。また、南極地域観測と言って思い浮かべるものは人それぞれであろう。様々な方々のこれまでの半世紀の思いを直径26.5mmという制約の下、タロとジロに代表してもらうことにした。タロとジロの背後に、当時の日本人の夢が託された船、初代南極観測船「宗谷」を配している。裏面には、南極大陸とオーロラ。4つの星は、日本の観測施設を表している。素材はニッケル黄銅。現在製造されている通常の五百円貨幣と同じ素材・大きさである。

引換については、全国の郵便局及び銀行等において行われる。発行枚数は、日本銀行を通じて、引換を行う郵便局及び銀行等に対して調査を行い、その調査結果等に基づいて決定される。

郵便局及び銀行等には、「国家的な記念事業」として記念貨幣が発行されるという趣旨を御理解いただき、積極的な御協力をお願いしたい。

最近の記念貨幣は、同一テーマで銀行等による額面価格での引換と独立行政法人造幣局によるプレミアム型の販売との両方が行われることが多かった。南極地域観測50周年記念貨幣は、平成6年8月の関西国際空港開港記念貨幣以来十余年ぶりに、同一テーマにおいて銀行等による引換発行のみの（プレミアム型の販売を伴わない）記念貨幣である。

南極地域観測50周年の記念式典は、平成19年1月頃に行われる予定である。この記念式典に間に合うように、現在製造準備中である。聞くところによると、南極地域観測50周年の記念切手は同月23日に発行される。このタロ・ジロ記念コインも、記念切手発行日と同じ日かその前後の日に引換が開始されることになるだろう。



日本は、南極条約の原署名国として、南極地域の平和的利用による国際協力体制の発展に重要な役割を果たしてきた。南極地域観測は、日本の国際貢献の象徴の一つである。特に、オゾンホールを発見につながった継続的な観測など、地球環境変動に関する科学的知見は、国際的意義の非常に高いものである。南極地域観測は、科学技術分野における国際舞台への復活であるが、日本が政治的に国際社会への復帰を果たした時期とも重なる。昭和31年（1956年）10月に日ソ共同宣言が調印され、日ソ間の戦争状態の終了と外交関係の再開が実現した。日ソ国交回復は2か月後に日本の国際連合への加盟を可能

にした。こうして、昭和31年（1956年）12月18日、日本は国連80番目の加盟国となった。日本の宗谷が氷に取り囲まれ動けなくなった時、ソ連のオビ号が助けてくれた。数か月前までは国際法上は戦争状態にあった国の船からの救援に、多くの国民が感動したという。国際連合加盟も、南極地域観測開始とともに、この時代の日本の有り様を語るのに欠かせない。国際連合加盟50周年についても、記念貨幣が独立行政法人造幣局から販売される。発行枚数は7万枚、額面は千円、素材は銀である。販売価格は未定であるが、おそらく数千円になる見込みである。



子供や孫にタロ・ジロ記念コインをプレゼントしながら、南極探検のニュースに胸を躍らせた思い出を語る。子供達もいずれは自分も未知の世界に挑戦してみたいときめく。しかし、子供の興味は次々と新しいものに向かう。いつしかコインは勉強机の引き出しの片隅にしまいこまれてしまう。その子が長じるにつれ自分が何者か悩み始める頃、ふと引き出しの片隅にコインを見つける。そして、父あるいは祖父が子供の頃の夢を自分に語ったこと、それを聞いて自分も冒険心をかきたてられたこと、それらを思い出し、初心に帰る。また、このタロ・ジロ記念コインは、千年、二千年と残るだろう。古代ギリシャ・ローマのコインが今でも残っているように。千年後の日本人がこのコインを見つけて千年前の日本人の冒険心に思いを致す。いささか個人的な思いを述べるのが許されるなら、記念貨幣とはそういうものではないだろうか\*。

<sup>1</sup> 正式には、51年前の昭和30年（1955年）11月4日に「南極地域観測への参加および南極地域観測統合推進本部の設置について」が閣議決定され、国家プロジェクトとなった。

<sup>2</sup> 国立科学博物館で南極観測50周年記念として今年の7月15日から9月3日まで開催される「ふしぎ大陸南極展2006」において、タロとジロの複製が8年ぶりに再会するそうである。

\* 本稿において、意見にわたる部分及び制度の解説にわたる部分は、全て筆者の個人的意見又は個人的理解である。

本稿執筆中に、第一次南極越冬隊で地質調査と犬ぞりを担当した菊池徹さんの訃報に接しました。御冥福を心からお祈りします。